

Title	ジュディス・バトラーにおける「身体」および「物質性」についての研究
Sub Title	
Author	大貫, 拳学(Onuki, Takamichi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2003
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.56 (2003.) ,p.112- 115
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成14年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000056-0112

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジュディス・バトラーにおける「身体」および「物質性」についての研究

大 貫 拳 学*

1. 問題の所在

J. バトラーは、従来のフェミニズムの主張/運動が、「女」という「主体」を基盤としてきたことへの批判を行っている。彼女は、M. フーコーの系譜学やラカン派精神分析を参照しながら、「女」という名づけそのものが、性差別の権力関係による言説的な主体化にはかならないと論じる。それゆえ、バトラーにとっては、生物学的身体としてのセックスもまた、「ジェンダーと呼ばれる文化構築された装置がおこなう結果」(Butler 1990=1999: 29)ということになる。そしてバトラーは、主体が絶えざる構築過程にあることを、「パフォーマティヴィティ performativity」という概念で説明する。彼女は、パフォーマティヴィティの時間的契機を強調することで、現行秩序の再生産のみならず、既存の秩序からのズレや攪乱を理論化しようとするのである。

しかし、こうしたバトラー理論に対しては、身体や社会制度の物質的側面を軽視しているとの批判がなされている。

本研究の課題は、バトラーの身体観や、「物質性 materiality」という概念に着目しながら、主体についての反本質主義の観点から社会制度を論じることの可能性の模索にある。

2. 異性愛主義の「物質的」側面と(非)主体

本研究の成果としては、まず、大貫(2003)を挙げることができる。そこでは、N. フレイザーによる分配の政治/承認の政治という区分を手がかりとして、異性愛主義の「物質的」側面と「主体(化)」のありようとの関連性を検討した。

フレイザーは、セクシュアリティに関する差別・抑圧を、社会経済的な不公平に関する「分配の政治」の問題ではなく、文化的な不正に関する「承認の政治」の問題と位置づける。だが、フレイザー自身も認めるように、セクシュアリティの領域にも、社会経済的不平等と文化的な不正との双方が見出せるのであるから(Fraser 1995=2001: 111)、これを、分配/承認の一方に割り振るのは、妥当でない。しかし他方で、フレイザーの二元論を批判するI. ヤングが、「文化的な承認を経済や政治的正義の手段と理解すべき」(Young 1997: 148)と述べる時、今度は、文化的アイデンティティの問題を、物質や経済の問題に還元することになってしまう。したがって、特定の差別・抑圧の問題を、分配/承認、物質/文化という区分の一方に割り当てるのではなく、また一方を他方に還元するのではなく、「物質的なるものと文化的なるものの絡み合い」(Young 1997: 158)自体を問題にする必要がある。

バトラーは、「現在の風潮の中では、あらゆる種類のホモセクシュアリティが抹消され、圧縮され、あげくのはてに過激な同性愛嫌悪の空想の場へと再構成されてしまう」(Butler [1991] 1993=1996: 124)のだと言う。彼女は、このように「抹消」された、いわば「存続不可能な主体」を「(非)主体」とも呼ぶ(Butler [1991] 1993=1996: 123)。バトラー自身は、この「(非)主体」という概念にさほど大きな役割を与えていないが、大貫(2003)では、この概念を重視した。「(非)主体」とは、「真っ当な社会成員」たる「正しい主体」としての有徴項であり、それゆえ存在を無視され、あるいは漠然と嫌悪のイメー

ジを押し付けられるような存在のあり方とすることができる。

マルクス主義フェミニズムは、近代社会における公私の分離のなかで、女性の労働力が搾取されていることを指摘してきたが、この公私の分離という点から「非異性愛者」の存在を考える時、かれ/彼女らのおかれた不安定な位置が明らかになる。近代社会において、公的領域は性的に中立な（その実、「異性愛男性」のための）空間とされるとともに、セクシュアリティは私的な（プライベートな）こととみなされる。したがって、性的に有徴化された「非異性愛者」は、私的領域にとどまらざるをえない。しかし、私的領域たる「家族」は、異性愛を前提としているのである。こうした存在のあり方が、「(非)主体」としての「非異性愛者」なのである（cf. 大貫 2001: 221-2）。かくして、「(非)主体」とは、社会空間上の位置を与えられる「真っ当な社会成員」に対して、社会的位置を与えられない存在と解することができる。

このように、「(非)主体」は、社会経済上の特定の場所に組み込まれていないから、当該カテゴリーにおいて直接的には物質的搾取の対象とはなりにくい。しかし、かれ/彼女らは、そのことによって逆説的に、社会経済構造に関わっているのである。すなわち、性別役割分業にもとづく社会空間上の公私の分離は、異性愛主義を前提とするのだが、かかる異性愛主義をイデオロギー的に構成しうるためには、「構成的外部」としての「非異性愛者」のアイデンティティが不可欠となる。

さて、バトラーは、言語の外部とは、哲学的言説が、自らの首尾一貫した体系性を維持するために生産したものだとして、物質/言語という二元論の脱構築を試みている。彼女によれば、物質性と構築性は対立するものではなく、物質性そのものが基礎的な書き込みなのである（Butler 1993: 28）。西洋形而上学の伝統のなかで、女性は、アリストテレスにおける質量（物質）matter/形相（形式）form という二項対立の前者と関連づけられてきた。しかしバトラーは、L. イリガライを批判的に読み解きながら、女性的なるもの the feminine とは、そうした二項対立の一項を構成するものではなく、かかる二項対立を可能にするための前提としての物質性 materiality の位置にあるものだという。ここでの「物質性」とは、いわば思考の前提として自明視されるがゆえに、思考から排除されてきたものである。この点においては、本稿で論じた「(非)主体」と、女性的なるものとは、共通している。また、バトラーは、監獄の物質性と囚人の身体の物質性をパラレルに把握する（Butler 1993: 33）。だが、C. ハルが述べるように、「物質性の異なる形態を区別する必要がある」（Hull 1997: 28）だろう。それゆえ、「身体の物質性」と「制度の物質性」の関係をより詳細に検討することが重要である。

3. 社会空間と主体（化）

バトラーの論文「パフォーマティヴィティの社会的魔術」（Butler 1999）は、P. ブルデューの「実践の論理」における主客二元論克服の失敗を指摘する。池田・大貫（2002）では、このバトラーのブルデュー批判を議論の出発点として、今後の社会学理論の課題を提起した。本稿には、本研究で得られたバトラーの身体観についての知見の一部が反映されている。なお、本稿では、行為の時間次元を重視する観点から、ブルデューの〈場〉の概念の読み直しも行ったが、以下では、本研究の課題と直接的に関連する部分に限定して、本稿の内容を紹介するにとどめる。

ブルデューは、主観主義における自立した主体という想定と、客観主義の機械的決定論をともに批判し、〈場〉におけるハビトゥスの条件づけられた自由と、ハビトゥスの自由への〈場〉の条件づけを説く。しかし、バトラーによれば、ブルデュー理論において、〈場〉の生成がハビトゥスを前提としている一方

で、ハビトゥスの形成は〈場〉を前提としているために、ハビトゥスが常に〈場〉と適合的となってしまう。そして、それは、ブルデューが、言語的ハビトゥスの外部に制度を所与として位置づけたこと（言語と社会の二元論）に端的に表れているのだという。

バトラーは、ブルデューにおいて「ハビトゥスや、儀礼としての社会的実践がもつ時間次元」が強調されていることは認めつつも、空間化された用語で描かれる〈場〉という「客観的な」領域へと議論がシフトするとき、「時間性へのピントは消えてしまうようだ」と述べている（Butler 1999: 125. 強調部分は原文ではイタリック体）。もっとも、ブルデュー理論における〈場〉は、バトラーが指摘するほどには固定的ではない。実際、ブルデュー自身も、「社会的空間とそこに配置されている諸集団」を「歴史的闘争の産物」と捉える見方を強調している（Bourdieu 1987=1991: 27）。しかし、ブルデュー理論では、〈場〉の参加者が、同じ目的を目指していることを前提とするため（Bourdieu 1979=1990I: 253）、未来の到達目標としての支配的位置は所与とされる。そして、行為の時間的な推移は、〈場〉のある位置から別の/同じ位置へと移動する「軌道」として記述される（Bourdieu 1979=1990I: 171-6）。つまり、実践の時間的産物であるはずの空間が、実践の時間的産出を規定してしまうのである。また、ブルデューは〈場〉の変化についても論じている。しかしその場合も、参加者は、支配的階級によって示される特定の趣味や学歴などの具体的特性の獲得を目指すか、目的となる特性が変化しても、前提にある位置の順序関係自体は維持される（Bourdieu 1979=1990I: 243）。さらに、位置それ自体の変化も、既存の〈場〉の競争で他の参加者より優位に立とうとする試みの結果であるため、基礎にある位置の序列関係はやはり維持される（Bourdieu 1979=1990I: 243）。

ブルデューにおいては、社会的位置に結びつけられた行為者があらかじめ存在したうえで、特定の諸条件に適ったハビトゥスを形成することになる。このことは、暗黙のうちに「ハビトゥス」以前の所与として、「主体」を設定してしまっていることを意味する。これをジェンダー論の文脈でみれば、性別二元論を前提としてしまうという難点につながる。いわば「身体化」される以前の「身体」が想定されていることになるのだ。さらに強調したいのは、あらかじめ「主体」を設定してしまうと、主体化が同時にその外部を産出しているという事態に目を向けられないということである。たとえば、前節で述べた「(非)主体」のような存在のあり方を考察するには、主体化の過程や社会空間のあり方自体を問題化しなくてはならない。

4. 結 語

本研究では、言語/言語の外部、分配/承認という二元論や、どちらか一方への還元では、制度と主体の関係を適切に理論化できないことを明らかにした。L. マックナイは、バトラーに代表される最近のフェミニズムは、象徴的なもの the symbolic の問題に過度に焦点を当てたため、物質的なもの the material の問題を十分に扱うことができていないと述べるが（McNay 2000: 14-7）、この批判は、象徴/物質という二元論を、かかる区分を拒否するバトラーの理論に無理やり重ね合わせており、この意味では不適当なものと言える。しかし、バトラー自身が、物質化や物質性について言及しながらも、社会制度の具体的な機制を十分かつ適切に論じてこなかったのは確かである。

したがって、物質/象徴の相互還元不可能性を、二元論に陥ることなく再定式化することが今後の課題となる。より具体的なレベルで言えば、特定の制度と特定の主体（化）のありようを検討する必要があるだろう。

【本報告で言及した文献】

- Bourdieu, Pierre, 1987, *Choses dites*, Minuit. (=1991, 石崎晴己訳『構造と実践——ブルデュー自身によるブルデュー』藤原書店.)
- Bourdieu, Pierre, 1979, *La distinction: critique sociale du jugement*, Minuit. (=1990, 石井洋二郎訳『ディスタンクシオン——社会的判断力批判I・II』藤原書店.)
- Butler, Judith, 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge. (=1999, 竹村和子訳『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社.)
- Butler, Judith, [1991] 1993, "Imitation and Gender Insubordination," Henry Abelobe, Michèle A. Barale and David M. Halperin eds., *The Lesbian and Gay Studies Reader*, Routledge. (=1996, 杉浦悦子訳「模倣とジェンダーへの抵抗」『imago』7(6): 116-35.)
- Butler, Judith, 1993, *Bodies That Matter: On Discursive Limits of "sex"*, Routledge.
- Butler, Judith, 1999, "Performativity's Social Magic," Richard Shusterman ed., *Bourdieu: A Critical Reader*, Blackwell: 113-28.
- Fraser, Nancy, 1995, "From Redistribution to Recognition?: Dilemmas of Justice in 'Post-Socialist' Age," *New Left Review*, 212. (=2001, 原田真見訳「再分配から承認まで?——ポスト社会主義時代における公正のジレンマ」『アソシエ』2001年1月号: 103-35.)
- Hull, Carrie L., 1997, "The Need in Thinking: Materiality in Theodor W. Adorno and Judith Butler," *Radical Philosophy*, 84: 22-35.
- 池田心豪・大貫挙学, 2002, 「バトラーのブルデュー批判から見えること——社会的位置の構築と主体(化)をめぐる問題」『現代社会理論研究』12: 89-100.
- McNay, Lois, 2000, *Gender and Agency: Reconfiguring the Subject in Feminist and Social Theory*, Polity.
- 大貫挙学, 2001, 「フェミニズム理論からみた近代と主体——公私の二重構造とジェンダー/セクシュアリティ」『哲学』三田哲学会, 106: 183-229.
- 大貫挙学, 2003, 「異性愛主義と(非)主体」『哲学』三田哲学会, 109: 249-72.
- Young, Iris M., 1997, "Unruly Categories: A Critique of Nancy Fraser's Dual Systems Theory," *New Left Review*, 222: 147-60.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

世論研究の現状と展望

—コミュニケーション過程としての世論の総合的モデルの模索—

金 鐵 鎔

Glynn et al. (1999) は、「世論は時間の経過と関係のない静的で動かない物体ではない。むしろそれは人々がどのように考え、どのように相互作用し、どのように政治的なものを彼らの中で組織化していくのか、という、非常にダイナミックで、流動的過程である」(p. 381)と主張した。また、Price & Roberts (1987) は「世論形成過程は時間の経過を伴う、様々な次元の間を含むコミュニケーション現象」(p. 811)であり、したがって、「世論研究は意見調査の問題の次元を超え、コミュニケーション科学として行われるべきである」(p. 811)と強調している。

このように、世論をコミュニケーション過程の産物として捉えると、世論過程におけるの二つの情報または影響のソースとしてのマス・メディアとインターパーソナル・コミュニケーションはきわめて重